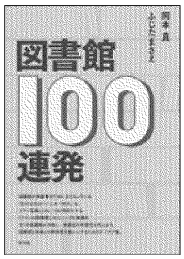
本棚ぶらり

テーマ　図書館

『図書館100連発』

岡本 真（おかもと まこと）・ふじた まさえ／著
青弓社　2017年



「一つひとつは小さな知識でも、100という数が集まることで大きな価値になる」と筆者が言うとおり、本書では、全国各地の図書館が行っている創意工夫が100通り紹介されている。

たとえば、定期的にトークイベントを行って地域の人と協働で情報や知識を生み出す拠点を作ったり、開けてみるまでどんな本が入っているか分からない「福袋」を企画したり、事例の大半は予算をほとんど必要としないアイデアばかりである。

さりげない緻密な工夫を見つけに図書館へ足を運びたくなるような一冊。

『世界の図書館』

ジェームズ・W.P.キャンベル／著
ウィル・プライス／写真
桂 英史（かつら えいし）／日本語版監修
野中 邦子（のなか くにこ）・高橋 早苗（たかはし さなえ）／訳
河出書房新社　2014年

図書館建築の歴史は、変化と順応で満ちている。それは、図書館に求められる機能や、本の価値・形態が古今東西で異なるからだ。叡智の象徴として見せるため豪奢に作られたこともあれば、グループ作業のように様々な活動を行う場所として作られたこともある。

蔵書の保全にも多様な手段が取られてきた。本を湿気から守るため、棚の間の風通しを良くしたり、逆に本を箱に入れて完全に密閉したり。盗難対策も様々で、西洋で本一冊と家一軒が同等の価値だった時代、見た目からも分かるほど強硬な手段が取られていた。はたしてその手段とは。

各時代・地域の理想を具現化した図書館の姿を、全ページに渡り写真で伝える迫力の一冊、ぜひご覧あれ。

『アルカイダから古文書を守った図書館員』

ジョシュア・ハマー／著
梶山（かじやま） あゆみ／訳
紀伊国屋書店　2017年

2012年夏、アフリカ西部のマリ共和国トンブクトゥで、勇敢な男と仲間たちが命がけで古文書救出作戦に乗り出した。男の名はハイダラ。

ハイダラは古文書の収集と保護に情熱を傾け、自身の図書館を設立し、アフリカの失われた歴史と文化を世界に発信していた。しかし、トンブクトゥの街がイスラム過激派に占拠されて以降、彼らの理想に反するものはすべて排除されるようになる。古文書も例外ではなく、貴重な古文書を所有する国立研究所が燃やされた。ところが、焼失したのは一部のみだったことがわかった。ハイダラはどのようにして作戦を成功させたのだろうか。

本書では、イスラム教徒の間での「寛容」と「不寛容」の思想の対立、武装勢力との緊迫した戦いを、克明に描いている。

『ラオス 山の村に図書館ができた』

安井 清子（やすい きよこ）／著
福音館書店　2015年

東南アジアの内陸国ラオスの、少数民族モン族が住む小さな村で、民話の研究活動をしていた筆者。思いがけない巡り合わせで、村に図書館をつくる取組みを始めた。

当初は「図書館とは何なのか」も知らなかった村の人々も、1年余りにわたる共同作業を通して、図書館への関心を高めてきた。村の小学生たちも、家事や農作業の手伝いで忙しい合間に、作業に協力してくれる。

2007年2月、オープンの日を迎えた、村の図書館。その後、著者の手を離れ、村の人々により運営されるようになった図書館の様子はどうか。

新たにつくられた図書館が人々の生活に根付いていく姿を通して、「図書館とは何なのか」、あらためて考えさせられる。